になった。

146 （秋が深まり静寂さが訪れ）小川がはるか遠くまでさらさらと流れている音を聞き、（静かに）その様を思いやる。

147 （こうした情景を目にすると）痩せて虚弱な身体も、にわかに健やかになるような気持ちがするし

148 （こうした情景に）身を任せていると（病のことも忘れ）命も伸びる心地がする

149 （その一方でこうした好時候に巡り合うと）茫然自失し、心（魂）が京都に馳せて行ってしまうのである。

150 まぶたを閉じると（改めて京の事が想起され）、目から涙が止めどもなく流れ出る。

151 都に帰れる日は　いったいいつになるのだろうか。

152 故郷にたどり着けるのは　いったいいつになるのだろうか。

語釈

145 ○山　…ここでは太宰府謫居より眺められる山々の事。→補説①

○縹緑…薄青色、はなだ色。『随書』「礼儀志七」に「天子以雙綬六采、玄黄赤白縹緑」の例が見える。

146 ○潺湲…水のさらさらと流れる様。又その音。

『楚辞』「九歌、湘夫人」に「荒忽兮遠望、観流水兮潺湲」の句が見える。また『懐風藻』「大津首、和藤原太政遊吉野川之作詩」に「潺湲浸石波、雑沓應琴鱗」の句が見える。

『菅家後集』「470 和紀處士題新泉之二絶。次韻」に「瑠璃地上水潺湲、遮莫銀河在碧天」の句が、